

不登校経験と進学後の学校嫌い感情との関連<sup>1) 2)</sup>A Study of the Relationship between Prior School  
Non-Attendance and School-Aversion in University Students.興津真理子・水野邦夫・上西恵史・吉川栄子・高橋 宗  
(OKITSU Mariko, MIDZUNO Kunio, JONISHI Keishi, YOSHIKAWA Eiko, & TAKAHASHI Shu)

## 要 約

本研究では高等学校までに不登校を経験した者が、進学後、現在の学校や自己・他者をどのように捉えているのかを検討した。大学生と専門学校生 87 名を被調査者として、学校嫌い感情測定尺度と、自己・他者観を捉える諸尺度を実施した。これらを学校嫌い感情測定尺度による学校嫌い高群 (N=21)、低群 (N=17)、および不登校経験群 (N=9) の 3 群間で比較したところ、不登校経験群は学校嫌い高群と同程度に進学後も高い学校嫌い感情を持っていた。しかし、ポジティブな自己・他者観に関しては、不登校経験者の自己受容や自己信頼感の得点は、学校嫌い高・低群の間に、また、自尊感情は学校嫌い高群よりも有意に高い傾向にあり、不登校を契機として、こうしたポジティブな自己認識が育まれる可能性が示唆された。一方、ネガティブな自己・他者観に関しては、不登校経験者は対人交流における過度な自己抑制傾向が学校嫌い高群と同程度に高く、これが現在の学校嫌いの一因となっているのではないかと考えられた。

**Key Words** : 学校嫌い感情、不登校経験、自己・他者観

## はじめに

平成 15 年度学校基本調査の速報 (2003、文部科学省) によれば、「不登校」を理由とする児童生徒数は、小学校 2 万 6 千人 (前年度間より 6 百人減少。対前年度比 2.4% 減)、中学校 10 万 5 千人 (前年度間より 7 千人減少。対前

1) 本研究は、平成 15 年度聖泉大学総合研究所特別共同研究費の助成を受け、その一部として行われた。

2) 本研究は、関西心理学会第 115 回大会 (平成 15 年 10 月 19 日開催、於 甲南女子大学) において口頭発表された。

年度比 6.1%減) の合計 13 万 1 千人 (前年度間より 8 千人減少。対前年度比 5.4%減) で、30 日以上欠席者を調査し始めた平成 3 年度間以降初めて減少したと報告された。しかし、平成 3 年度の不登校児童生徒数は 6 万 6 千人であり、この 10 年あまりで 2 倍近く増加してきていることを考えると、不登校への対応を考えていくことは重要な課題であるといえよう。

不登校に関してこれまで多くの研究が報告されているが、そのうち森田 (2003) は、平成 5 年度に「学校ざらい」を理由に年間 30 日以上欠席し中学校を卒業した生徒を対象として、不登校当時の状況、当時の心境、不登校時の援助体制、その後の進路状況等について追跡調査を行った。その中で不登校であったことがマイナスに影響したかどうかについて尋ねたところ、「マイナス」24%、「マイナスではない」39%、「どちらでもない」35%という結果が得られた。不登校で失ったものとしては、「人間関係 (友人・信頼など)」、「学校生活 (学力、思い出など)」が挙げられる一方、得たものとしては「精神的な強さ」、「人間関係」、「ゆっくり考える時間」などが挙げられた。

この結果から、不登校経験は心理的危機である一方で、自己を問い直すきっかけとして、自他に対するポジティブな見方を育むというポジティブな側面も持つのではないかと考えられる。

そこで本研究では、高等学校卒業までに不登校を経験した者が、進学後、現在の学校をどのように捉え、自己や他者をどのように捉えているのかを、学校嫌い感情との関連から検討することを目的とした。

## 方 法

**被調査者** 大学 1 年生及び看護系専門学校 1 年生 87 名 (男子 42 名、女子 45 名)。

**質問紙** 調査に用いた質問紙は、以下の尺度によって構成された。

1. 学校嫌い感情測定尺度 (古市、1991) : 一般の児童・生徒が抱く学校に対する忌避的な感情を「学校嫌い感情」とし、その度合いを 12 の質問項目で測定するものである。12 項目のうち、「今のクラスはよくない

ので、ほかのクラスに変わりたい」は大学生への質問項目としては実情に合わないので削除し、11項目を用いた。

2. 自尊感情尺度 (山本・松井・山成、1982) : 自身を「これでよい」と感じる程度を測定する10項目の質問紙であり、自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていることを意味する。
3. 自己受容尺度 : 田中 (2002) による居場所機能尺度をもとに作成した5項目を用いた。
4. 信頼感尺度 (天貝、1995) : 対人的信頼感を多次元的に測定する尺度であり、「自分への信頼 (6項目)」「他人への信頼 (8項目)」「不信 (10項目)」の3下位尺度から成る。
5. 改訂版 UCLA 孤独感尺度 (工藤・西川、1983) : 対人関係全般における孤独感を測定する尺度で20項目から成る。
6. 異なった関係における孤独感尺度 (広沢・田中、1984) : 孤独感を関係性の次元、相互作用性の次元から測定する質問紙であり、本研究では、友人関係孤独感に関する10項目を用いた。
7. エゴグラム AC 尺度 (杉田、1990) : 交流分析理論に基づいて、5つの自我状態を測定する尺度である。5つの自我状態とは、(1)批判的な親の自我状態である Critical Parent (以下 CP)、(2)養育的な親の自我状態である Nurturing Parent (以下 NP)、(3)合理的な判断をする成人の自我状態である Adult (以下 A)、(4)自由な子どもの自我状態である Free Child (以下 FC)、(5)従順で抑制的な子どもの自我状態である Adapted Child (以下 AC) である。このうち本研究では AC 尺度 (10項目) を用いた。
8. フェイス・シート

過去の不登校経験有無、期間、理由をたずねる質問を含めた。

なお、1～7の各尺度への回答は、すべて5段階で評定できるようにした。

手 続 き 被調査者に上記質問紙を配付し、大学生には回答のうえ後日提出

するように、専門学校生には授業時間の一部を利用してその場で回答するように、それぞれ求めた。

**各群のグルーピング** 不登校経験のある者9名を不登校経験群とした。なお、この群の者は専門学校生はおらず、全て大学生であった。また、学校嫌い感情尺度については、四分位得点により、1.63よりも低得点の者17名を学校嫌い低群、2.90よりも高得点の者21名を学校嫌い高群とした。なお、不登校経験者は男子6名、女子3名であり、不登校開始年齢は11～18歳（平均年齢=12.89歳、SD=2.32歳）であり、不登校終了年齢は14～18歳（平均年齢=15.33歳、SD=1.22歳）、不登校期間は1年未満～6年であった。

## 結 果

各群の学校嫌い得点について 学校嫌い高群、低群、不登校経験群の学校嫌い感情得点の平均値を図1に示す。

各群を被験者間要因とする分散分析を行ったところ、有意差が見出された ( $F(2,44) = 89.60, p < .01$ )。Tukey法による多重比較を行ったところ、学校嫌い高群と不登校経験群が、学校嫌い低群よりも学校嫌い感情得点が有意に高かった。したがって、これまでに不登校を経験した者は、学校嫌い高群と同程度に、大学においても高い学校嫌い感情を持っているといえよう。

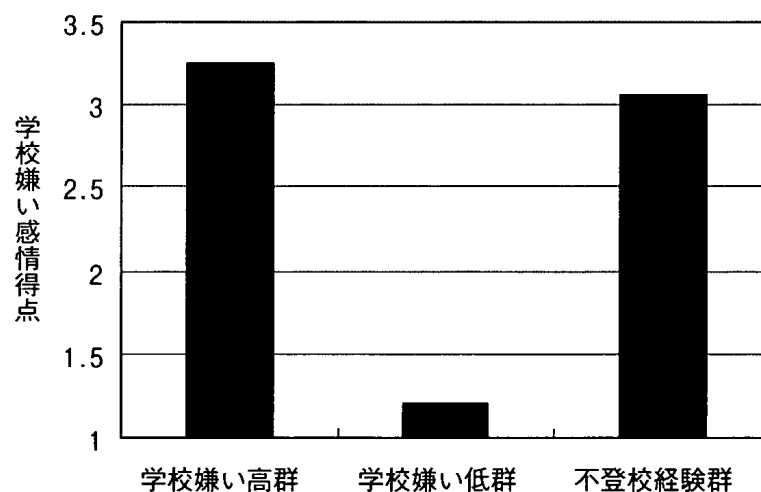


図1 各群における学校嫌い感情得点の平均値

また、不登校経験群の学校嫌い感情得点と不登校開始年齢、不登校終了年齢、不登校期間との関連を図2、図3、図4に示す。学校嫌い感情得点と不登校開始年齢との相関は .59、不登校終了年齢との相関は .47、不登校期間との相関は -.43 であった。すなわち、本研究の不登校経験群に関しては、不登校開始年齢、不登校終了年齢が高い者ほど、また不登校期間が短かった者ほど大学における学校嫌い感情が高い傾向が見られた。

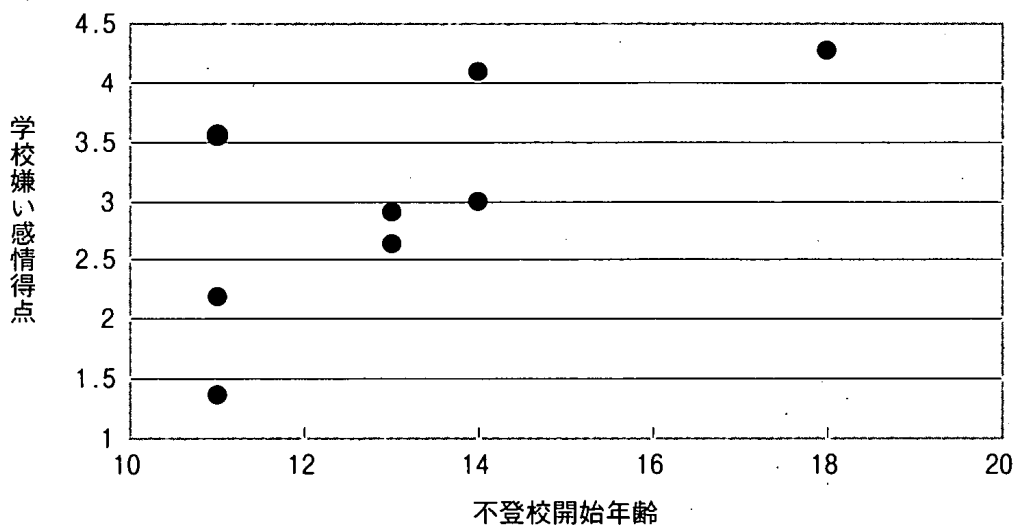


図2 不登校開始年齢と学校嫌い得点との関連

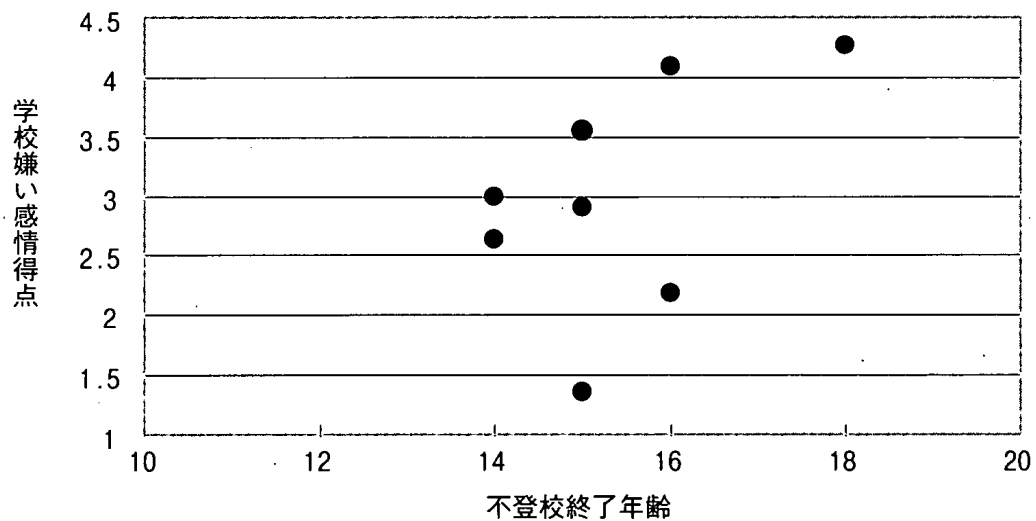


図3 不登校終了年齢と学校嫌い感情得点との関連

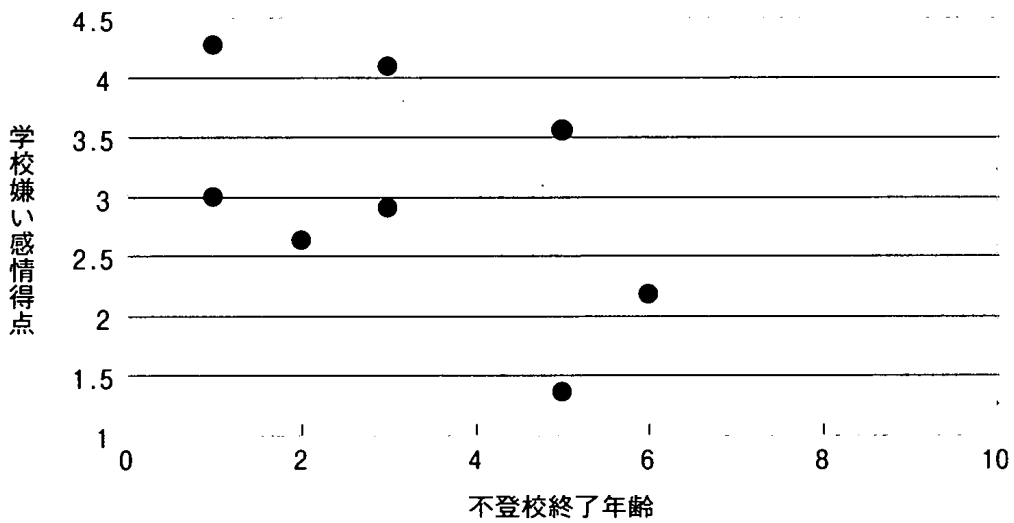


図4 不登校期間と学校嫌い感情得点との関連

自己・他者観の諸尺度における各群の違い まず、自己・他者観の諸尺度のうち、自尊感情、自己受容、自分への信頼、他人への信頼というポジティブな側面に関する尺度についての平均値を図5に示す。これらについても、各群を被験者間要因とする一要因の分散分析を行った。分散分析の結果、全尺度において有意差が見出された ( $F_s(2,44) = 3.73 \sim 7.25, p < .05$ )。いずれも、学校嫌い低群の得点が最も高い。Tukey法による多重比較を行ったところ、全ての尺度において、学校嫌い高群と低群との間に有意差が見られ ( $p < .05$ )、また、自尊感情については、不登校経験群の得点と学校嫌い高群の得点との

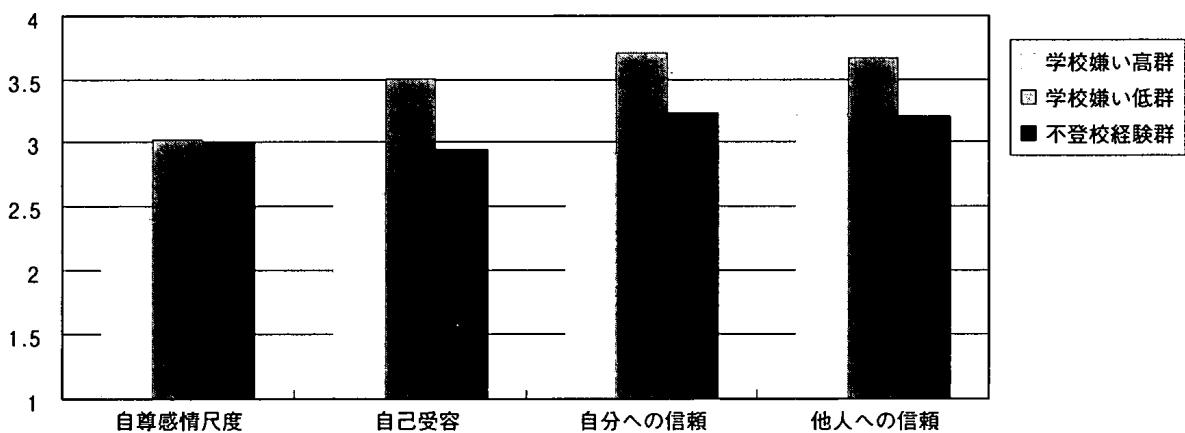


図5 各群における自己・他者観諸尺度 (ポジティブ) の平均得点

差に有意傾向が見出された ( $p<.1$ )。いずれにおいても、学校嫌い低群が自己をポジティブに捉えているが、自尊感情においては、不登校群も学校嫌い高群と比較して高い傾向があることが見出された。

次に自己・他者観の諸尺度のうち、UCLA 孤独感、友人関係孤独感、他者不信、エゴグラム AC 尺度といったネガティブな側面に関する尺度についての平均値を図 6 に示す。他者不信を除く諸尺度において、有意差が見出された ( $F_s(2,44) = 3.95 \sim 4.19, ps<.05$ )。多重比較の結果、UCLA 孤独感、友人関係孤独感については、学校嫌い高群と低群との間に有意差が見出され ( $p<.05$ )、いずれも学校嫌い高群の得点の方が高かった。エゴグラム AC 尺度については、学校嫌い高低との差が有意であり ( $p<.05$ )、さらに学校嫌い低群と不登校経験群との差に有意な傾向が見られた ( $p<.1$ )。

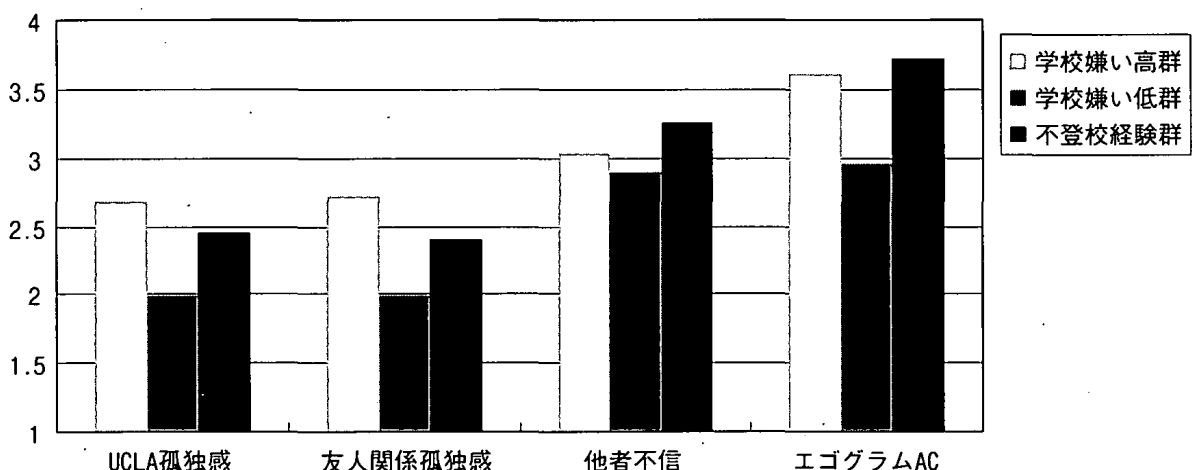


図6 各群における自己・他者観諸尺度（ネガティブ）の平均得点

不登校経験者における学校嫌い感情と自己・他者観との関連 次に不登校経験者における学校嫌い感情と自己・他者観の諸尺度との相関を表 1 に示す。学校嫌い感情と自尊感情、自分への信頼との間に有意な負の相関、エゴグラム AC 尺度との間に有意な相関が見られた。学校嫌い感情が高いほど自尊感情、自分への信頼が低く、学校嫌い感情得点が高いほどエゴグラム AC 尺度得点も高かった。

表1 不登校経験者における学校嫌い感情得点と諸尺度との相関

	自尊感情尺度	自己受容	自分への信頼	他人への信頼
学校嫌い感情得点	-.70*	-.43	-.70*	-.41
	UCLA 孤独感	友人関係孤独感	他者不信	エゴグラム AC
学校嫌い感情得点	.33	.37	.66 <sup>+</sup>	.75*

\* $p < .05$ , <sup>+</sup>  $p < .1$ 

## 考 察

本研究では、現在学校嫌い感情が高い者、低い者、不登校経験者の自己・他者観を比較することにより、不登校経験がもたらすものについて検討することを目的とした。

学校嫌い感情得点について これまでに不登校を経験した者は、学校嫌い高群と同程度に大学においても高い学校嫌い感情を持っていることが明らかになった。また、不登校開始年齢、不登校終了年齢が高いほど、また不登校期間が短いほど学校嫌い感情得点が高かった。現在大学に進学、通学していることを考えれば、不登校開始年齢が高く、不登校終了年齢が高いほど不登校期間は短くなる。このため、不登校時の問題が解消されないまま進学している場合があるのではないかと推察される。不登校の経過についてはこれまで多くの研究がなされている。そのうち、稲村（1988）は不登校の経過を表2のように7期に分けた。本研究の被調査者のうち、不登校期間が短い者の中には、これらの経過の中途にありながら進学しているケースもあるのではないかと考えられる。

ポジティブな自己・他者観について 不登校経験者の自己受容や自己信頼感の得点は、学校嫌い高・低群の間にあり、自尊感情は学校嫌い高群よりも有意に高い傾向にあった。また、不登校経験群については、自尊感情は学校嫌い低群と同程度の平均得点だったが、学校嫌い感情が高いほど自尊感情が低いという関連性が見られた。自分への信頼も、同様に学校嫌い感情が高いほど自分への信頼が低かった。

以上のように、不登校経験群は学校嫌い感情得点は学校嫌い高群と同等



表2 稲村(1988)による不登校の経過

(1) 心気症期	心気症状を呈する時期。頭痛や腹痛、めまい、吐き気、下痢、発熱などさまざまである。病院に行っても、異常はないと言われることが多い。数日すると回復するが、少し学校へ行くとまた心気症状が生じ、休んでしまう。
(2) 不穏期	心理的に落ち着かず、いらいらして逸脱行動に陥る点に特徴がある。よくみられるのは家族への暴力で、過干渉の家庭ではその傾向が著しい。
(3) 無為期	字義どおり何もせず、自閉的で無気力な時期。昼夜が逆転ないしずれた状態となり、外出などほとんどせず、自室にこもりがちの、きわめて非生産的な生活態度となる。
(4) 意欲回復期	次第に意欲が出てきて自発行動が増えてくる。心理的にも安定し、前向きの姿勢が出始める。電話の対応、買い物、散歩、友人と会ったりもするようになる。事例によって進行速度は違う。
(5) 登校再開期	長い間休んでいた状態から、再び学校へ行き始める。しかし、持続できずにまた休み始めたり、保健室登校をしたり、すぐ帰宅してしまうなど安定していない。
(6) 不完全適応期	適応困難期とも言え、登校は再開したもののまだ十分な適応状態に至らない。
(7) 学校(社会)適応期	スムーズに登校が持続できるほか、心身ともに改善し、かつ安定して、困難やつまずきに直面しても耐え、危なげなく学校、社会生活に適応できる時期。ここではじめて登校拒否が治療できたといえる。

に高いが、その中で高い自尊感情や自己信頼感といった自己に対するポジティブな見方を持っている者は、学校嫌い感情が低かった。先述の森田(2003)の調査で、不登校経験者が不登校経験から得たものとして挙げた「精神的な強さ」には、こうしたポジティブな自己観が含まれると考えられよう。

ネガティブな自己・他者観について 不登校経験者においては、エゴグラムAC尺度に見られる対人交流における過度な自己抑制傾向が、学校嫌い高群と同程度に高く、またAC尺度の得点が高いほど学校嫌い得点も高かった。これは、不登校経験者にとって、解決されていない問題であると考えられる。

図7は、森田(2003)において、平成5年度に中学校第3学年に在籍した者を対象として、「中学校を卒業した頃と比べて現在の自分が成長した点はどんなところか」、「自分の同世代の人と比べて今の自分の課題はどんなことか」と、不登校経験によって成長した点と現在の課題について調査を行った

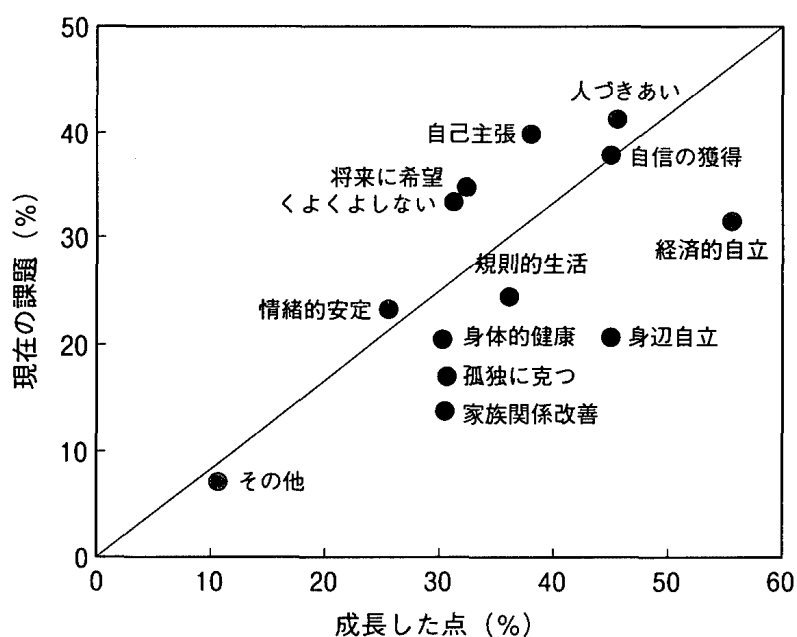


図7 各項目における「成長した点」と「現在の課題」を挙げた人数比率  
森田(2003)をもとに作成

結果である。現在の課題として最も多くのものが挙げたのは「人づきあい」で、次いで「自己主張」が挙げられた。これは、不登校経験者がその後の生活において、コミュニケーションの難しさを感じていることを示している。このコミュニケーションの難しさの基底には、AC尺度に見られるような、対人交流場面における過度な自己抑制傾向があると考えられよう。こうした傾向により、学校の居心地が悪くなり学校嫌いが促進されているのではないかと考えられる。

以上のように、森田(2003)で、不登校経験者が挙げている不登校経験のポジティブな側面が本研究でも示唆された。しかし、これが不登校経験によるものなのか、その後の経験によるものなのかは本研究では結論付けることはできない。不登校経験者に対するより詳細な調査が必要と思われる。不登校経験者がどのように不登校を乗り越えてきたのかについての詳細な検討は、今後不登校児童・生徒に必要な支援を考えていく際の方向性を示すものとなると思われ、この意味でも不登校経験者の声に耳を傾けることは重要だと考えられる。

また、不登校経験者で学校嫌い得点の高い者においては、現在も何らかの課題を抱えていると考えられる。こうした学生には、自尊感情、自己信頼感を高める関わりや、過度な自己抑制傾向を変化させる関わりが必要だと考えられる。交流分析理論においては、5つの自我状態のうち低いものを上げることで、自我状態のバランスが変化するとされている。こうしたことを考慮した対応を検討していくことも今後の課題であろう。

### 引用文献

- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, **43**, 364-371.
- 古市裕一 1991 小中学生の学校ざらい感情とその規定因 カウンセリング研究, **24**, 123-127.
- 広沢俊宗・田中國夫 1984 異なった関係における孤独感尺度の構成 関西学院大学社会学部紀要, **49**, 179-188.
- 稲村 博 1988 登校拒否の克服 新曜社
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(1) 孤独感尺度の信頼性・妥当性 実験心理学研究, **22**, 99-108.
- 森田洋司 2003 不登校－その後 不登校経験者が語る心理と行動の軌跡 教育開発研究所
- 文部科学省 2003 平成15年度学校基本調査速報  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/03080801/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/03080801/index.htm)
- 杉田峰康 1990 医師・ナースのための臨床交流分析入門 医歯薬出版株式会社
- 田中順子 2002 思春期・青年期の「居場所」の心理構造 具体的場面・「居場所」感情・「居場所」機能の観点からの検討  
<http://pweb.sophia.ac.jp/~y-aketa/thesis/2002/mt02-04.pdf>
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.